

日本語版 Emotional Approach Coping Scales (状況版) の作成

—— 因子的妥当性と信頼性の検討 ——

内田 香奈子*

(キーワード：ストレス，情動焦点型コーピング，状況版)

目 的

内田(2018)は、日本語版 Emotional Approach Coping Scales(特性版)を開発した。Emotional Approach Coping Scales (以下、EAC)は Stanton, Kirk, Cameron, & Danoff-Burg(2000)が情動焦点型コーピング (emotion-focused coping) の接近的な側面を強調し、開発した尺度である。情動焦点型コーピングとは、Folkman & Lazarus(1980)に代表されるコーピングの下位概念であり、ストレスフルな感情を調整しようとする対処を指す。他方の問題焦点型コーピング (problem-focused coping) は、ストレスの原因への対処を指す。現在では、ストレスや種々の目的により、多くの下位概念が存在する (Skinner, Edge, Altman, & Sherwood, 2003)。しかし、定石の分類はなく、先の分類をベースとしている場合も多い (内田, 2018)。この2つのコーピングが健康や適応に与える影響をみると、問題焦点型コーピングは適応の向上に寄与する知見 (e.g., Riley & Park, 2014) が示されている。一方の情動焦点型コーピングは、知見が混乱している。たとえば、Endler & Parker(1990)では、情動焦点型にあたる感情指向型コーピング (emotion-oriented coping) がうつや神経症傾向などと正の関連を示している。

Stanton, Danoff-Burg, Cameron, & Ellis(1994)は、混乱の原因として、次の3点を指摘している。第1は、情動焦点型という単一の集合体の中に、たとえば接近や回避といった逆方向の方略が含まれる点を、第2に、既存尺度の情動焦点型に該当するコーピング方略の中に、苦痛などのストレス反応と交絡した項目が混在している点を指摘している。実際、Stanton et al.(1994)は、公刊されている4つの尺度項目にストレス反応を含む項目があることを確認している。そして第3には、ストレスフルな出来事を取り巻く感情を同定、理解、そして表現することを試みる方略を包含する尺度の欠如を指摘した (内田, 2018)。

EACは上記の問題を考慮して開発された尺度となる。自らの感情の理解に取り組み、意義を探し求めようと試みることにより対処しようとする、感情処理 (emotional processing) と、個人間や個人内 (例えば日記を書くことや、芸術作品など) で感情をあらわす、感情表出 (emotional expression) の2下位尺度から構成される。また、普段使用しているコーピング方略を測定する特性的コーピング (dispositional coping) と、特定の時点における特定のストレスフルな出来事に対して行われる状況的コーピング (situational coping) 両者の立場が測定可能なことも特筆される。なお、両アプローチの比較は Carver, Scheier, & Weintraub(1989)が提唱した、項目はそのままに教示文のみ変更する形での比較方法を採用している。

両アプローチを比較することが可能な尺度は、EACの他にもいくつか開発されている (e.g., Psychometric Characteristics of the Children's Coping Strategies Checklist (CCSC), How I Coped under Pressure Scale (HICUPS): Ayers, Sandler, West, & Roosa, 1996; COPE Scale: Carver et al., 1989; General Coping Questionnaire (GCQ): 佐々木・山崎, 2002, 2004; Emotional Coping Questionnaire (ECQ): 内田・山崎, 2006a, 2007)。これらの尺度を用いて検討された結果から、特性的なコーピングは状況的コーピングを予測する可能性が示されている (e.g., Carver & Scheier, 1994; Sasaki & Yamasaki, 2005)。しかし、比較検討できる尺度数は少なく、さらに健康との関連を比較検討した研究知見については、一貫した結論が得られていないものもある。

たとえば、内田・山崎 (2006b, 2013) や Uchida & Yamasaki(2008)では、情動焦点型コーピングのうち、感情表出方略に的を絞り、特性的あるいは状況的コーピングと抑うつとの関連を検討している。その結果、たとえば単独で表出する独立的感情表出において、特性的コーピングでは一貫して抑うつを高める結果であった (内田・山崎, 2006b; Uchida & Yamasaki, 2008) 一方で、状況的コーピングでは抑うつを高めるあるいは何も影響がな

*鳴門教育大学大学院 心理臨床コース 心理・教育科学領域

い等の一貫性がなく、横断的 (cross-sectional) あるいは予測的 (prospective) 研究方法といった研究デザインや、その対象集団によって異なる結果となった。この傾向は EAC を用いた研究でも同様であり (Stanton et al., 2000), 性別や方略の使用方法によって EAC から適応への影響が異なる可能性があった (内田, 2018)。

このように情動焦点型コーピングの健康や適応への知見は様々な側面で一貫しておらず Stanton et al.(2000)やアプローチ間の比較検証のためにも日本語版 EAC (状況版) の作成が必要であった。よって、本研究では日本語版 EAC (状況版) を作成する。その際、既に作成された日本語版 EAC (特性版) をベースとして状況版の開発を行う。なお、本研究では作成の手始めとして因子構造と信頼性の確認を中心に検討する。

方 法

調査対象者 大学生 473 名。このうち本調査への同意が得られた者、ならびに欠損データを除く 422 名(男性 164 名, 平均年齢 19.37 歳, $SD=1.23$, 女性 258 名, 平均年齢 19.58 歳, $SD=1.10$) を分析対象とした。

調査材料 項目は日本語版 EAC 特性版 (内田, 2018) と同様のものを使用した。なお、原版ではショートバージョンの項目などが示されている。しかし、尺度作成は出来るだけ多くの項目数からのスタートが望ましいと判断し、日本語用の EAC 特性版では各下位因子 8 項目, 計 16 項目を用いた。よって、状況版も同様の 16 項目から作成した。教示は原版にならない、今の状況の中で回答者にとって最もストレスとなる出来事へのコーピング問う形式を用いた。回答も原版と同様の 4 件法を用いた。よく行っている (4 点), とときどき行っている (3 点), あまり行っていない (2 点), まったく行っていない (1 点) で求めた。なお、例えば“あまり行っていない”の原版の表記は“I did this a little bit”であったため、本来であれば“少し行った”のように翻訳するべきであった。しかし、教示文が今の状況におけるコーピングを問う形であるため、全て現在のことを問う形式とした。また、織田 (1970) の日本語程度量表現の研究では、頻度を問う表現用語に“少し”という表現は含まれないことや他の程度表現との間隔を考え、この表現に限り“あまり”という形容詞を採用した。

手続き 2017 年に大学の講義等を利用し、実施者が協力者に直接教示した。講義担当者には調査概要を説明し、協力者には調査への協力は強制ではない旨を伝え、参加に同意を得た。また回答時に苦痛を感じる場合には離脱してもよい旨を伝えた。なお、別の調査目的のため、他に 3 つの尺度を同時に実施した。調査後には事後説明を行った。

なお、因子構造再現性の検討には AMOS(Ver.25.0, IBM Inc.)を、その他の分析には SPSS(Ver.23.0, IBM Inc.)を用いた。本研究は、鳴門教育大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

結 果

因子的妥当性 最尤法、プロマックス回転による因子分析を行い、固有値 1 以上で全体と女性で 2 因子が、男性で 3 因子が抽出された。回転前の固有値は、全体で 6.19, 3.86, 女性で 7.07, 3.26, 男性で 5.14, 4.65, 1.12 であった。なお、男性の 3 因子目には「自分が実際に感じていること、時間をかけて理解する」などの 3 項目が抽出された。しかし、他の因子への負荷も同時にみられたことに加え、固有値の変化量や解釈のしやすさから、最終的に 2 因子を抽出した。第 2 因子までの累積寄与率は全体で 62.79%, 男性で 61.16%, 女性で 64.57% であった。

次に、男女で共通して適用可能となるよう、(a) 当該因子への因子負荷量が.40 以上、(b) 男女間で共通の項目、(c) 各下位因子において内容的妥当性を満たす項目、(d) 当該因子とその他の因子との差が.10 以上の差である項目、(e) 他への因子負荷量が.30 未満の項目の 5 点に配慮して項目を絞った。最終的に特性版と同様の感情処理 8 項目、感情表出 6 項目、計 14 項目で構成される EAC 状況版が完成した。最終的な因子負荷量と累積寄与率の値を Table 1 に示す。

信頼性、得点分布の正規性、ならびに下位尺度間相関 下位尺度ごとの信頼性を検討するため、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、感情処理は.91, 感情表出は.93 とそれぞれ高い値を示した。また、得点分布の正規性を確認するため、平均値、標準偏差、信頼性係数、ならびに尖度と歪度を算出した。その結果、尖度と歪度については、絶対値で 1 以下の値を示した。よって、EAC 状況版の得点分布は正規分布からの歪みが小さいこと

Table 1 EAC 各項目の因子負荷量 (全体)

項 目	因子負荷量	
	I	II
I. 感情処理		
9 自分の感情に気づき, 理解しようとする	.79	-.01
13 自分が実際に感じていることを, 時間をかけて理解する	.78	-.07
15 自分の感じていることを理解しようとする	.77	.03
6 自分の感じていることを十分に理解するために, じっくり考える	.76	-.17
10 自分の気持ちについて, そう感じる理由をよく考える	.73	-.01
3 自分の感情をみきわめようとする	.73	.06
7 自分の気持ちにはそう感じる理由があり, その気持ちの大切さを十分に理解する	.69	.10
2 自分の感情をもっとよく理解する方法を探す	.66	.09
II. 感情表出		
5 ためらわずに自分の感情を表現する	-.03	.87
4 自分の中で感じていることを表に出す	.04	.86
16 自分の感じていることを隠さずに出す	-.03	.83
11 自分の感じていることを遠慮なく出す	-.04	.83
14 自分の感情を表に出してみる	.06	.82
1 自分の感じている気持ちを表に出す	.01	.81
	累積寄与率 (%)	39.71 67.11
	因子 II との相関	.18

Table 2 EAC の基礎統計量ならびに Cronbach の α 係数

	感情処理	感情表出
平均値	20.95	15.58
中央値	21.00	16.00
標準偏差	5.32	4.69
尖度	.24	-.39
歪度	.14	.21
α 係数	.91	.93

が示された。また、両因子間の相関係数については弱い有意な値が確認された ($r = .18, p < .01$)。下位尺度間相関は Table 1, それ以外の値の詳細は Table 2 に示す。

確証的因子分析 ECQ の因子構造検討のため、確証的因子分析を行った。なお、先の因子分析において下位因子間は弱い相関関係であったことから、確認のため、両因子間に相関を仮定する斜交モデルと相関を仮定しない直行モデルをそれぞれ実施した。なお、修正指数に基づき、同一の因子を構成する項目の誤差変数間のみ限定し、共変動を仮定した。数値の判断には Schermelleh-Engel, Moosbrugger, & Müller(2003)は各適合度指標の採択基準を設定した。両モデルともに Good Fit の基準を満たす値を示していたが、斜交モデルの方がより適切な値を示すことが確認された。詳細を Table 3 に示す。

Table 3 EAC におけるモデルの適合度

	χ^2	<i>df</i>	<i>p</i>	<i>GFI</i>	<i>AGFI</i>	<i>CFI</i>	<i>NFI</i>	<i>RMSEA</i>
斜交モデル	102.378	58	.000	.968	.941	.988	.974	.043
直交モデル	120.191	59	.000	.963	.934	.984	.970	.050

注) *GFI* = Goodness-of-Fit Index, *AGFI* = Adjusted Goodness-of-Fit Index, *CFI* = Comparative Fit Index, *NFI* = Normed Fit Index, *RMSEA* = Root Mean Square Error of Approximation

考 察

本研究の目的は日本語版 EAC の状況的アプローチが可能な尺度を作成し、その因子構造と信頼性を確認することであった。その結果、日本語版 EAC (特性版) と同様の項目で教示文の変更のみで状況的コーピングの測定が可能な尺度が完成した。因子構造についても特性版と同様に感情処理と感情表出の 2 因子が抽出され、各数値からも適切な因子構造や信頼性が確認された。先にも述べたように、特性的コーピングと状況的コーピングの比較が可能な尺度は少ないことに加え、健康や適応への影響が混迷している情動焦点型コーピングに的を絞った尺度が開発されたことは意義があると言えよう。

以下に今後の課題を示す。第一に妥当性の検証である。本研究では因子的妥当性のみの確認にとどまったが、今後は併存的あるいは弁別的妥当性などの検証を行い、EAC の構成概念妥当性を確認する必要がある。方途としては、一つ目に EAC (特性版) と同様の測定ツールを使用し、確認することである。内田 (2018) では Bagby, Parket, & Taylor(1994)によって開発された Toronto Alexithymia Scale(TAS-20)の日本語版 (小牧他, 2003) の下位尺度の外的志向と感情の伝達困難を使用し、感情処理、感情表出両因子の弁別的妥当性を、GCQ の下位因子である感情表出を用い、感情表出との併存的妥当性を確認する形を採用した。ただし、この方法は感情処理の併存的妥当性の側面が検証できないという課題を残している。この点において、特性版とともに本尺度においても、実験的検討や他者による評定などの二つ目の方途を併用する必要がある。

第二の課題は、確証的因子分析の検証に、因子的妥当性と同一のデータを使用した点である。本研究では直交と斜交モデル、いずれのモデルを採用するべきかを判断するため、同一のデータを使用した。しかし、本来であれば因子構造の安定性を確認するためにも、確証的因子分析用に新たなデータを用いて検証する必要がある。今後、妥当性の検証とともに追研究を行い、安定した因子構造が得られるのかを確認する必要がある。

そして第三の課題としては、本尺度と健康や適応との関連を探り、特性版との結果の相違を検証する必要がある。内田 (2018) では POMS(Profile of Mood States)の短縮版 (横山, 2005) における緊張 — 不安や活気といった 6 種類の気分との関連を検証した。その結果、健康や適応に対して感情表出では怒り — 敵意を高めるといった負の影響を、感情処理では活気を高めるといった正の影響を確認した。同様の結果が確認されるのか、比較検証が必要である。

また、内田 (2018) でも指摘しているが、情動焦点型コーピングについて探る方途としては、そのターゲットとなる感情にも留意した研究デザインを組む必要があるだろう。Uchida, Yokoshima, Kaya, & Yamasaki(2017)では、EAC 特性版を用い、潜在的感情 (implicit affect) や顕在的感情 (explicit affect) との関連を検証している。

その結果、女性において潜在的・顕在的両負感情の高さが感情表出の使用を低める結果などを確認している。同時に潜在的正負両感情の高さが抑うつを低減する結果なども確認していることから、同様の変数を用いた状況版での検証も必要となる。

以上の事から、課題は残したものの、日本語版 EAC の状況的アプローチが可能な尺度が作成された。本ツールを用いて今後も検証を重ね、情動焦点型コーピングが私たちの健康や適応に与える影響を検証したい。そして、検証の蓄積が、私たちがストレスと上手くつきあう方途の一助となることを期待する。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

謝 辞

本研究は JSPS 科研費 JP16K17335 の助成を受けて実施しました。研究へご協力いただきましたみなさまに、心より御礼申し上げます。

引用文献

- Ayers, T. S., Sandler, I. N., West, S. G., & Roosa, M. W. (1996). A dispositional and situational assessment of children's coping: Testing alternative models of coping. *Journal of Personality, 64*, 923-958.
- Bagby, R. M., Parker, J. D., & Taylor, G. J. (1994). The Twenty-item Toronto Alexithymia Scale- I. Item selection and cross-validation of the factor structure. *Journal of Psychosomatic Research, 38*, 23-32.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. (1994). Situational coping and coping dispositions in a stressful transaction. *Journal of Personality and Social Psychology, 66*, 184-195.
- Carver, C. S., Scheier, M. F., & Weintraub, J. K. (1989). Assessing coping strategies: A theoretically based approach. *Journal of Personality and Social Psychology, 56*, 267-283.
- Endler, N. S., & Parker, J. D. A. (1990). Multidimensional assessment of coping: A critical evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology, 58*, 844-854.
- Folkman, S., & Lazarus, R. S. (1980). An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior, 21*, 219-239.
- 小牧元・前田基成・有村達之・中田光紀・篠田晴男・緒方一子…久保千春(2003). 日本語版 The 20-item Toronto Alexithymia Scale(TAS-20)の信頼性, 因子的妥当性の検討心身医学, *43*, 839-846.
- 織田揮準 (1970). 日本語の程度量表現用語に関する研究 教育心理学研究, *18*, 166-176.
- Riley, K., & Park, C. L. (2014). Problem-focused vs. meaning-focused coping as mediators of the appraisal-adjustment relationship in chronic stressors. *Journal of Social and Clinical Psychology, 33*, 587-611.
- 佐々木恵・山崎勝之 (2002). コーピング尺度 (GCQ) 特性版の作成および信頼性・妥当性の検証 日本公衆衛生雑誌, *49*, 399-408.
- 佐々木恵・山崎勝之 (2004). 敵意と健康状態の因果関係における状況的コーピングの媒介機能 健康心理学研究, *17*, 1-9.
- Sasaki, M., & Yamasaki, K. (2005). Dispositional and situational coping and mental health status of university students. *Psychological Reports, 97*, 797-809.
- Schermelleh-Engel, K., Moosbrugger, H., & Müller, H. (2003). Evaluating the Fit of Structural Equation Models: Tests of significance and descriptive Goodness-of-Fit Measures. *Methods of Psychological Research Online, 8*, 23-74.
- Skinner, E. A., Edge, K., Altman, J., & Sherwood, H. (2003). Searching for the structure of coping: A review and critique of category systems for classifying ways of coping. *Psychological Bulletin, 129*, 216-269.
- Stanton, A. L., Danoff-Burg, S., Cameron, C. L., & Ellis, A. P. (1994). Coping through emotional approach: Problems of conceptualization and confounding. *Journal of Personality and Social Psychology, 66*, 350-362.
- Stanton, A. L., Kirk, S. B., Cameron, C. L., & Danoff-Burg, S. (2000). Coping through emotional approach: Scale

- construction and validation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 1150-1169.
- 内田香奈子・山崎勝之 (2006a). 感情コーピング尺度 (状況版) の作成と信頼性, 妥当性の検討 美作大学・美作大学短期大学部紀要, 51, 17-23.
- 内田香奈子・山崎勝之 (2006b). 大学生の感情表出によるストレス・コーピングが抑うつに及ぼす影響 学校保健研究, 48, 199-208.
- 内田香奈子・山崎勝之 (2007). 大学生用感情コーピング尺度の作成ならびに信頼性, 妥当性の検討 パーソナリティ研究, 16, 100-109.
- 内田香奈子・山崎勝之 (2013). 女性における感情表出コーピングが抑うつに及ぼす影響の予測的研究－感情表出のシグナリング機能に着目して－ 健康心理学研究, 26, 18-27.
- Uchida, K., Yokoshima, T., Kaya, I., & Yamasaki, K. (2017). Effects of implicit and explicit affect on emotion-focused coping. *International Academic Conference on Social Sciences*, Singapore, Dec. 20.
- 内田香奈子 (2018). 特性的な情動焦点型コーピングが日常の気分に与える影響 パーソナリティ研究, 27, 1-11.
- 横山和仁 (2005). POMS 短縮版手引と事例解説 金子書房

Development of the Japanese situational version of the Emotional Approach Coping Scales: Examination of the factor validity and reliability

UCHIDA Kanako*

(Keywords: stress, emotion-focused coping, situational version)

A great amount of research has been examining various functions of stress coping. However, the relationships between emotion-focused coping and both health and adjustments are still unclear. Especially, few scales that can examine the relations between dispositional and situational coping using identical scale items existed, which have prohibited us from comparing the effects of these two types of coping on health and adjustments. In line with this consideration, after Uchida et al. (2018) developed the dispositional version of the scale for measuring emotion-focused coping, its situational version that makes it possible to compare the effects of the two types of coping will be expected to develop. Thus, the purposes of this study were to develop the situational version of the Japanese Emotional Approach Coping Scale (EAC) for emotion-focused coping based on the extant dispositional version. The original situational version was developed using the same scale items as the dispositional one, but the instruction of the scale was changed to assess situational status. 473 university students completed the EAC that contained 16 items with a 4-point Likert format. Results showed that the EAC consists of two subscales with 14 items, Emotional Processing (EP) and Emotional Expression (EE), both of which have reliability and factor validity. Limitations of utilizing this scale are discussed, along with future promising research.

*Field of Psychology and Educational Science, Department of Clinical Psychology, Naruto University of Education